

ヨーロッパの庭園における植栽デザインに関する報告

宮内 泰之
(人間環境学科)

A Report on the Planting Design of the Gardens in Europe

MIYAUCHI Yasuyuki

Abstract

This paper reports the knowledge about the planting design of the gardens in Europe based on my visitation. In Pompeii which was the city of Roman Empire, the plantings based on an excavation result were reproduced in the garden space attached to a residence. In Villa d'Este which is a typically Italian garden, its vista and plantings are creating an authoritarian atmosphere, however planting management is a little neglected. In Stourhead Gardens which is typically English landscape garden, the deciduous forest surrounding the lake was creating the natural scene of England. In Munstead Wood which is one of the cottage gardens in England, its planting design had inherited the thought of Gertrude Jekyll.

はじめに

本稿では、ヨーロッパ諸国の庭園を視察し、各国の庭園デザイン、特に植栽デザインについて得られた知見を報告する。最初に、古代ローマ時代のポンペイ遺跡にて復元された住宅庭園等についてその現状、特に、具体的な植栽の復元、展示手法について述べる。次に、ルネサンス期に発達したイタリア庭園のデザインとその植栽について触れる。最後に、産業革命後のイギリスで発展した、それ以前の庭園デザインとは一線を画す自然風景式の庭園について、植栽デザインを中心に考察する。

1. 古代ローマの庭園遺跡

(1) ポンペイの概要

ポンペイは現在のナポリ近郊にあった古代都市である。紀元前80年代には古代ローマの植民都市となり、その後、ブドウの生産地であることからワインの醸造などを主産業とした商業都市として発展した。しかし、西暦79年にヴェスヴィオ火山の噴火により一夜にして町全体が溶岩の下に埋もれてしまい、18世紀に本格的な発掘が始まるまで町があったことすら忘れ去られてしまっていた。その後の発掘作業により、ポンペイは当時の街並みや建築物だけでなく、美術品や人々(印象化石としてだが)そのものまでそっくりそのまま保存されていたことが次第に明らかになった。

ポンペイではあらゆるものが一瞬のうちに封じ込められて保存されたため、資料や遺構として残ることが少ない市民の個人住宅の庭についても、通常では得難い多くの貴重な情報を提供することとなった。ここでは、2009年7月7日に訪れた「ファウヌスの住居」、「外科医の住居」、そして「サルステイウスの住居」の庭園部分のデザインと植栽、及びその変遷について考察する。

(2) ファウヌスの住居

ファウヌスの住居(図1)は、紀元前2世紀に建築されたポンペイ中で最も大きい面積(2,970㎡)を占める住居である。ポンペイの住居は玄関を潜ると「アトリウム」と呼ばれる接客空間が通常存在する。アトリウムの四方は壁に囲まれ床はタイル張りであるが、天井にはコンプルヴィウム(四角形の天窗)という開口部があり、その下はインプルヴィウム(四角形の雨水溜め)が配置されている。地中海気候区に属するため、雨量は少なく、採光と涼を優先させた構造である。ファウヌスの住居は、2つの玄関と2つのアトリウムが左右に並んでおり、通常の住居よりも贅沢なつくりとなっている。アトリウムの奥には廊下や部屋を隔てて「ペリステイリウム」と呼ばれる、主に家



図1 ファウヌスの住居
(シルビア・カッサーニ、1988より転載)

族がくつろぐために利用された中庭が存在する。ペリスティリウムは柱列が四方を取り囲み、中央には噴水やインプルーヴィウムを配するものが多く、舗装されていないため草花や低木だけでなく比較的大きな木が整形的に植えられていた。ファウヌスの住居には大小2つのペリスティリウムが手前と奥に配置されている。通常の住居ではペリスティリウムは1か所あればよい方なので、この点からもファウヌスの住居の持ち主の財力や重要性がうかがわれる。現在、ファウヌスの住居のペリスティリウムにはイタリアサイプレス、ナツメヤシ、セイヨウキョウチクトウ、ローズマリーなどの常緑の植物が植えられているが(写真1)、これらの植物はこの住居の発掘成果に基づいて植えられているわけではない。ただし、ポンペイ遺跡からは、マツ、ナツメヤシ、ブドウ、イチジク、ザクロ等の種子などの遺体が発掘されている。また、住居等の壁に描かれたフレスコ画には、セイヨウキョウチクトウ、セイヨウミザクラ、セイヨウヤマモモ、ヨーロッパナ、トキワガシ、バラなどの樹木、ユリ、スマレ、キクなどの草花が見られる。このような全体の発掘成果に基づき、庭の植物とその植栽状況を推測し、現在の様なペリスティリウムの植栽が施されているのであろう。



写真1 ペリスティリウムの植栽
(ファウヌスの住居)

(3) 外科医の住居

外科医の住居(図2)は紀元前3世紀頃に建てられた、ポンペイでも最も古い住居の一つと考えられている。ポンペイの一般的な住居と同様に、玄関を潜るとアトリウムが配置されている。アトリウムの奥のタブリヌム(一家の記録を保管するための部屋)を経て、この住居の最奥部に位置するホ



図2 外科医の住居
(シルビア・カッサーニ、1988より転載)

ルトゥスという小庭園に至る。ホルトゥスは囲まれた場所という意味で、菜園などが作られていたが、時代が下ると、ペリスティリウムへと形を変えていった。現在、外科医の住居のホルトゥスには玄関からアトリウムへの軸線を挟んでほぼ対称的に2本のイタリアサイプレスが植えられている(写真2)。



写真2 アトリウムとホルトゥスのイタリアサイプレス(外科医の住居)

(4)サルスティウスの住居

サルスティウスの住居(図3)は外科医の住居と同様、最も古いものの一つと考えられている。その構造も類似しており、アトリウムの奥の住居の最奥部にはホルトゥスが配置されている。ここには現在、ブドウが植えられている。また、アトリウムの右手には小庭園がある。天井はなく、三方を列柱に囲まれ、中央には小さな噴水がある。玄関からアトリウムへの軸線上には位置しておらず、アトリウムよりも狭い空間であるが、内部はペリスティリウムとほぼ同じ構造となっており、ホルトゥスからペリスティリウムへの変化の過程が示唆される、興味深い事例である。現在、この小庭園にはセイヨウイチイとツゲが整形的に配植されている(写真3)。



図3 サルスティウスの住居
(シルビア・カッサーニ、1988より転載)



写真3 アトリウム右手の小庭園
(サルスティウスの住居)

2. イタリア式庭園

(1) イタリア式庭園の概要

14世紀、イタリアでルネサンスと呼ばれる時代が始まる。ルネサンスは15世紀にかけて文化、芸術、科学など様々な分野で革新的な発展をもたらすが、庭園文化においても新しい時代の幕開けとなった。一般的にはイタリア式庭園、イタリアテラス式庭園、あるいはイタリア露壇式庭園と呼ばれる庭園様式が完成される時代である。この庭園様式の一般的な特徴は次の通りである。①丘の傾斜地に数段のテラスを造成し、テラス間には階段等を設け、水を落とす等の動的な仕掛けをつくる。②四角形につくられた数段のテラス内に、直線や円を用いて幾何学的なデザインの池や花壇をつくる。③最上段のテラスの中央部に邸宅を配置することにより、斜面を利用した庭園内外への壮大な眺望を得るとともに、最下段から見上げる際には邸宅がより象徴的に映る効果を演出する。④水平方向および斜面方向にビスタ（軸線）を設け、幾何学性を強調する。特に、庭園中央の斜面方向のビスタは、最上段の邸宅をより豪華に、権威的に見せることに効果を発揮する。

ルネサンスは16世紀にはマニエリスムの時代、17世紀にはバロックの時代へと変遷していく。庭園デザインもまたこの時代変遷と共に変化を遂げる。以下では、マニエリスム時代の庭園としてティボリのエステ荘をとりあげ、2009年7月10日に訪れた際の調査結果に基づき庭園デザインについて報告する。

(2) エステ荘

エステ荘はローマの東方約25kmにある丘の上の町ティボリに位置している。1560年から75年頃にかけて、この丘の北西斜面にティボリの統治をまかされた枢機卿イッポリト二世の別荘としてエステ荘が建てられた。マニエリスム時代の庭園の特徴は、整形的な庭園デザインの中に手の込んだ彫刻を多く置くことにより自然に対する芸術の優越を表現すること、また、人を驚かせるための機械的な仕掛けが庭園内に設置されていることなどとされている。エステ荘はこの特徴をよくあらわしており、庭園内には近くのアドリアーナ荘から古代ローマ時代の彫刻を運んできて設置したものなど、ギリ

シャの神々の彫刻が多く置かれている。また、今日では水圧を利用した動く仕掛けが失われてしまっているが、水オルガンやフクロウの噴水などの仕掛けが各所につくられていた。

今日、エステ荘を訪れると、最上段に位置する館の中を歩いて庭園に下りていく順路となっているが、別荘として使われていた当時の入り口は、最下段のテラス中央部であった。現在この場所には小さな閉ざされた門があり、ここから館に向かって、真っ直ぐにビスタが通じている。館の方向を眺めると、ブドウのアーチとその先の「イタリアサイプレスの円形広場」越しに庭園中央に位置する「ドラゴンの噴水」が見え、アイ・ストップとなっている。ここからはドラゴンの噴水の背景として館の一部が見えているにすぎないが、見えていないだけに館の壮大さを連想させられる。ドラゴンの噴水に向かって歩いて行くと、数条の通路を横切る。交差部から左右の通路を眺めると、それぞれが斜面に対して水平方向のビスタとなっており、ツゲの低い生垣に視線を誘導された先には噴水やグロット（洞窟）がアイ・ストップとして配置されている。全体でみると、このような縦横の数条の通路が碁盤の目ようになっており、それぞれがビスタを形成している。イタリアサイプレスの円形広場を抜けると、「養魚池」がある。ここから左手をみると池の先に「ネプチューンの噴水」、さらにその先にはグロットと「オルガンの噴水」が見える。大量の水が贅沢に使われているこの庭園ならではの風景の始まりである。さらに進むと両脇にカスケード（階段状の小さな滝を連続して設けた水路）を施した直線のスロープを上りドラゴンの噴水の前にたどり着く。円形のドラゴンの滝の両脇はそれぞれ半円のカスケードを配した階段となっている。（現在は通れないが）この階段を上って、「百噴水の小道」に達する。この小道は水平方向の通路となっており、館側に150mにわたる二段の壁泉が並んで壮観を呈している。壁泉側は常時湿っているためアジアンタムが着生し、石造りの堅い雰囲気と和らげている。ここからは真っ直ぐに館へ上る階段がないので、左右いずれかの端まで歩くことになる。小道の左手の先には「ロメッタ」あるいは「ローマの噴水」があり、「ローマの像」がアイ・ストップとなっている。反対側の先には「長円の噴水」あるいは「ティボリの噴水」が見える。左右それぞれの噴水の手前の階段を上り、さらに斜めのスロープや

階段を経て最上段のテラスにたどり着くと、そこは館の正面の広場である。ここからは庭園が一望できるとともに、ローマ近郊のパノラマを遠望することができる(写真4)。上記のような順路で上った往時の人々は、常に館を仰ぎ見ながらようやく館の入り口にたどり着いてこの壮大な景色を眺めながら、この別荘の持ち主の財力、権力というものを思い知らされたことであろう。しかし、今日では、庭園植栽に注目すると園内のイタリアサイプレスをはじめとする常緑高木が少々高く成長しすぎているため、庭園を一望した際に雑然とした感じがするのは否めない。往時の人々は今よりもはるかに整然と管理された植栽景観を眺めていたことだろう。庭園の植栽管理の具合によって、庭園デザインが変質してしまうことを指摘しておきたい。

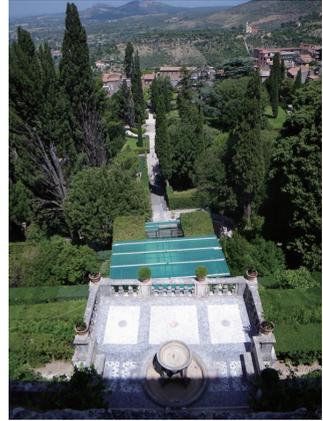


写真4 エステ荘最上段から
中心線のビスタを見下ろす

3. イギリス式庭園

(1)イギリス式庭園の概要

イタリア式庭園が流行した後、庭園デザインは斜面から平地へと敷地を移す。そして、より広大な面積に平面幾何学模様を整然と展開するフランス式庭園がフランスを発祥としてヨーロッパ全体に広まり、イギリスでもこの庭園様式が流行する。

一方、18世紀にはじまる産業革命は近代化を促進し、富裕な市民を生み出していく。その半面、都市の住環境は著しく悪化したため、上流および中産階級の人々は地方の豊かな自然へ心身の安らぎを求めるようになる。さらに、古典主義の写実的な風景画などの影響を受け、郊外に自然風景式のイギリス式庭園がつくられるようになる。

(2)ストアヘッド・ガーデンズ

2008年10月12日、英国南西部ウILTシャー州にあるストアヘッド・ガー

デング (以下ストアヘッドと略す) を訪れた。ストアヘッドは広大な敷地を受け継いだヘンリー・ホア二世が、1740年代から1760年代にかけて豊富な財力を投じてつくった代表的な自然風景式庭園である。ストア川を堰き止めてつくった広大な湖を庭園の中心とし、この湖の周りにアポロ神殿やパントオン、彫像、タワーなどを配した。このデザインは当時流行していたギリシャ神話やローマの古代文化、伝説をモチーフとしたピクチャレスクの世界を表現したものである。風景画の中に自分を置くことをイメージしながら、湖の周りを散策するようにできている。また、造園家のウィリアム・ケントの「自然は直線を嫌う」という言葉を、そのまま実践するかのような直線を排したデザインである。

池の周囲はブナ科やカエデ科の高木を中心とする落葉樹林で日本の冷温帯林を連想させる。しかし、林床にはササではなくセイヨウバクチノキが地表面をはうように覆っており、異国にいることを実感させてくれる。湖の岸辺はところどころ明るい芝地となっており、まさに自然に包まれてのんびりと過ごすことのできる庭園である (写真5)。

しかし、この風景式庭園の時代は産業革命の終焉と共に終わりを告げ、続く時代にはより小さなコテージガーデンなどが主流となっていく。



写真5 スタアヘッド・ガーデンズ

(3) マンステッド・ウッド

19世紀後半、産業革命の成果として大量生産が可能となったが、その反面、粗悪で芸術性の低い商品があふれていた。そのような時代に、ウィリアム・モリスがアーツ・アンド・クラフツ運動を主張、展開した。これは、手仕事を重視し、日常生活の中に芸術を取り込むことを提唱するもので、実際にこの考えに基づきインテリア製品などを作製した。

庭園デザインにおいては、先述のような広大な自然風景式庭園が陰りをみせ、より狭い敷地の田舎風のコテージガーデンに流行が移ってゆく。このよ

うな時代に登場するのが、造園家のガートルード・ジーキルである。ジーキルは画家を目指しており、モリスのアーツ・アンド・クラフツ運動に共鳴するが、視力の著しい低下のため画家をあきらめ造園の道に進むことになる。また、ジーキルはロマン主義の画家のウィリアム・ターナーの影響を受けていた。ターナーの作品は風景の中の光と大気を巧妙に表現する手法が特徴的であり、時に、全体がぼんやりとしたグラデーションで表現されている、印象派を30年も先取りしたような作品も描いた。この他、ジーキルは造園家のウィリアム・ロビンソンや建築家のエドウィン・ラッチェンスらからも影響を受けながら新しい庭園デザインを生み出していく。

ここでは、2009年5月17日のマンステッド・ウッドへの訪問に基づき、その庭園、および植栽デザインについて考察する。マンステッド・ウッドは1896年に建物部分をラッチェンスが設計したジーキルの自邸である。ジーキルはこの建物がある敷地の庭園デザインを自身で行った。

まず、主屋の正面はサウス・ローンと呼ばれる芝生広場となっており、そこから真っすぐビスタが通っている。ジーキルは自室の正面にこのビスタを据えている。ビスタの始まりの両脇には高さ15mほどのカバノキが自然な雰囲気 で植えられている。このビスタはグリーン・ウッド・ウォークと称され、その両脇に高さ5mほどのシャクナゲが植えられビスタを強調し、通路の先には鉢植えのシャクナゲがアイ・ストップとなっている。ビスタはイタリア式庭園の時代から整形式庭園において欠くことのできないデザイン手法とされてきたが、自然風景式庭園では排された手法である。しかし、このビスタが周りの自然と調和して見えるのは、以下に述べるジーキル独自のアイディアに基づくものである。一つ目の工夫は手前のカバノキはマンステッド・ウッド周辺にごくふつうにみられる植物であり、これが不等間隔に植えられていること、さらに、その根元にはこの辺りに自生するシダなどの草本類が繁茂しており、これらが自然の雰囲気を醸し出している。二つ目は通路両脇のシャクナゲが直線的に刈り込まれておらず、また、落葉樹やスズランなどの草花なども混ぜて高さを不均一とし、様々な緑色の葉が混ざっていることで、直線の通路でありながら自然の小道を歩いているかのような気持ちにさせている。さらにおもしろい点は、ビスタのアイ・ストップとなっている

シャクナゲの鉢植えの背後には、やはりこの辺りに自生するスコッチパインの苗木が植えられていることである(写真6)。確かなことはわからないが、このスコッチパインの苗は成長したのち、アイ・ストップの役割をシャクナゲの鉢植えから引き継ぐことになるのではないだろうか。つまり、安易に成木を持ってきて植えるのではなく、庭園の中で主要な構成要素となる



写真6 グリーンウッドウォーク先端の
シャクナゲとスコッチパイン
(マンステッド・ウッド)

植物を育てていくことにより、周りの自然との調和をも時間をかけて形成することを狙っているものと推測される。そして、このようなデザイン思想は、以下に述べるジーキルの作庭思想に源を求めることができる。

主屋西側にはウェスト・ローンと呼ばれる広場があり、その周りには曲線の通路によって島状に区画された植え込みがある。この広場を通り抜けた先にはメイン・フラワー・ボーダーがある(写真7)。このボーダーこそ、後のガーデンデザインに大きな影響を与え続けているジーキルの最も大きな功績であろう。あいにく花がほとんど咲いていない状態であったが、ジーキルの特徴的な花壇デザインはうかがい知ることができた。ジーキル以前の花壇は、派手な色の花を咲かせる草花を整形的に植え、花が終わったら次の季節



写真7 メイン・フラワー・ボーダー
(マンステッド・ウッド)

の花に植えかえていくというものであった。しかし、ジーキルはガーデンをキャンバスにとらえ、人と植物との全く新しい関係を築くことに成功した。通常、ボーダーは壁などを背景として、幅が狭く細長い帯状の敷地に草花を植えていく花壇である。ジーキルはこの帯状の敷地に、宿根草の苗を植え(一年草も混ざるが)、それが育ち、花を咲かせ実をつけていく過程

や、葉の色の変化なども楽しむことを重視した。特に、グレーがかった葉の色を好み、花をつけないシダ植物なども混ぜ、花や葉の色のグラデーションなども重視して配植を行った。このような作庭思想が、ガーデンをより自然に見せ、刻々と変化するガーデンの姿をもデザインの中に取り込むこととなった。

以上のようなジーキルのガーデンデザインは、ラッチェンスとの共作となるヘスタクーム・ガーデンズ等を代表とする多くのガーデンで実践された。そして、ジーキルのガーデンデザインに多大な影響を受けて、シシングハースト・キャッスル・ガーデン、ヒドコート・マナー・ガーデン等、英国を代表する庭園が造られていく。そして、今日、いわゆるイングリッシュガーデンとして、遠く離れた日本においても親しまれるようになっていく。しかし、今日の日本でイングリッシュガーデンと称されるものの中には、その表面的な部分だけを真似ているに過ぎないものも見受けられる。日本においてイングリッシュガーデンを作る際には、ジーキルのガーデン思想を良く理解し、これを日本の気候風土に合わせてアレンジする必要がある。

おわりに

ポンペイの遺跡庭園の復元と展示に関しては、日本とは事情が大きく異なっていた。ヨーロッパは石の文化であるため、建築物や構造物が立体的に（もちろん完全ではないが）残る可能性が比較的高く、そのまま展示した場合でも、見る者は遺跡の往時の姿をある程度想像することが可能である。しかし、日本は木の文化であるため、遺跡の年代が古ければ古いほど建築物等は地下の痕跡としてしか残らない、という状況がふつうである。そのため、復元作業は容易なことではなく、そもそも復元する必要性、妥当性が問題になる。これが植栽の復元となると、日欧どちらも同じ問題を抱えている。つまり、一般的な遺跡においては、植物は花粉や種子等の植物体のほんの一部が遺体として残るにすぎず、それら植物遺体から種を同定することはもちろん困難であるが、それのもととなった植物がいつ、どこに、どのような形で生育していたか、ということは雲をつかむような話になってしまう場合がほとんどである。この点に関しては、遺跡庭園に限らず、ある程度の年月を経た庭

園のすべてに当てはまることである。しかし、日欧いずれにおいても植物遺体の分析技術は確立され、その復元的な考え方も少しずつ進歩している。展示手法は地域によって異なるが、庭園デザイナーの作庭意図を尊重し、なおかつ、見る者に可能な限り正確に伝わるような工夫と努力が必要である。

ただし、現在する庭園の場合には、鑑賞者が植栽の変容から時の移り変わりというものを感じることもあっても良いのかもしれない。エステ荘で指摘したイタリアサイプレスの姿がこの点を意図しているのかは不明である。ストアヘッドの落葉樹林は、作庭当初からおそらくあまり変化はないのであろう。この樹林の中に身をおき、あるいは湖越しに眺めることにより、人間と自然の時間尺度の違いというものを感じることができた。一方、マンステッド・ウッドの庭は、本来日常生活の一部として存在し、そこに住まう者が植物の日々の変化を感じ、共に年を重ねていく空間なのではないだろうか。

なお、ヨーロッパの庭園デザインについては、全体の流れを把握するつもりであったが、今回の報告ではフランス式庭園とイスラム文化の影響を受けたスペイン式の庭園については割愛してしまった、今後の課題としたい。

参考文献

- Gertrude Jekyll(1982), *A Gardener's Testament*, Antique Collectors' Club
Joanne Berry(2007), *The Complete Pompeii*, Thames and Hudson
Lozzi Roma(1998), *Villa d'Este:Hadrian's Villa*
Maureen Lavelle(), *Munstead Wood*, Craddocks Printing Works
シルビア・カッサーニ(1998), ポンペイ, 65,83-84,Electa Napoli
土屋昌子(2008), ジーキルの美しい庭, 平凡社